
とある科学のちょ～ ♪ 電磁砲～禁書目録もあるよ ♪

とある青年の妄想論

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学のちよゝ
ゝ電磁砲ゝ禁書目録もあるよゝ

【Nコード】

N6784R

【作者名】

とある青年の妄想論

【あらすじ】

私上条当麻と妻との出会いを語る物語です、妻はヒロインは編別で違います、それでもいい方は進んでくださいm(´`´´´)m

プロローグ（前書き）

下手ながら頑張ります^^ 応援よろしく^^

ブローグ

私上条当麻は久しぶりの休みに家で娘と一緒に妻と出会った頃の写真を見ていた。

ふと娘は声を掛けてきた。

娘「パパママといっつ出会ったの？」

娘は可愛い素振を見せながら問いかけてきた。

当麻「パパが高校1年生の時だよ」

もちろん迷うことなく即答した。

娘「？」

娘は何を言っているか理解できていなそうだった。

当麻「わからなかったかな？璃里が大きくなったら教えてあげるよ」

璃里「わかったよ」

璃里は笑顔で頷いた。

すると下から妻の声が聞こえた。

妻「璃里、当麻ご飯できたよ」

その言葉を聴いた瞬間璃里は猛スピードで階段を降りていった。

当麻「・・・さすが自分の娘だ」

そう言いながら当麻は階段を降りていった。

テーブルにはカレーとシチューが置かれていた。

ちなみにカレーは当麻、シチューは璃里の大好物である

当麻「おっ今日はカレーですか」

妻「今日は久しぶりの休みだから当麻の好きな物を作ってみたの」

璃里「ママ〜パパ〜早くう〜」

璃里はスプーンの尾をテーブルに叩きながら言ってきた。

当麻「そうだな、それじゃあ」

家族『いただきます〜』

パクパクモグモグ

当麻「ん〜さすが***さん（ここにはいろいろな人が入ります）
が作る料理は世界一です！」

璃里「ママ〜すごくおいしいよ」

璃里は万遍な笑顔をした。

何時見ても可愛かった。

当麻「***」

妻「何？」

当麻「明日暇？」

妻「うん、明日は土曜だし仕事がないから暇よ」

当麻「そうか、じゃあ明日遊園地でも行きますか？」

その言葉にいち早く反応したのが璃里だった。

璃里「行く行く絶対行く！」

妻「行きましょう」

こうして私達は遊園地に行く事になった。

その夜

妻「ぐーすぴかー」

妻は隣でお休み中である。

当麻「***と出会ったときか」

そう思いながら当麻は寝付いたのだった。

その後彼は妻と出会った時の夢を見たのだった。

プロローグ（後書き）

どうもとあるです^^動画を見てピカンとしたので書いてみました、今のところ考えているのは科学サイドは御坂美琴、白井黒子、佐天涙子、初春飾利、魔術サイドは五和、神裂火織、インデックスの予定です

再会（前書き）

第3次世界大戦以降の話です、原作とは違い地元の人が助けくれたにしました、けっこう暗いです次からは明るい話を作りたいです、それではどうぞ^^

再会

第3次世界大戦が終わって私は学園都市^{こく}に戻ってきた。

数日間は戦争ことで騒ぎが起きていたけど自然に消えてった。

私は学校に行く気になれず引きこもっていた。

黒子が話してくるけど私は無視して布団に籠っていた。

そうアイツはもうこの世界に居ない、考えるだけで怖かった考えたこともなかった。

「・・・当・麻・当麻に会いたい」

「・・・お姉さま黒子は先に学校に行ってますわ」

何時もはあの腐れ類人猿がと言っている黒子も私の気持ちがわかるかのようにそっとしてくれた。

そしてふと私は思いついた・・・そうだ私も当麻と同じ場所に行けばいいんだ・・・なんで今まで気づかなかったのだろう簡単なことだったのに・・・

私はふらふらと街に出た

最後くらい数年間住んでいた場所を見て行きたかったからだった。

「この街も今日でお別れね・・・黒子や佐天さん達には悪いけどもう限界・・・」

私は独り言をブツブツ言いながら街を歩いていた。

セブンミスト、壊れた自販の公園・・・そしてアイツと出会った場所。

そこでアイツと出会った頃の事を思い出す。

「確か・・・私が複数の男に囲まれた時アイツが現れたのよね・・・」

「その後、いつの間にかアイツは私の好敵手ライバルになっていたでもそれも直ぐ好きな人変わった、そう私はアイツが好きだったんだ」

そう思い出していると不意に水滴が頬についた・・・いやそれは水滴ではなく涙だった。

「なんでよ・・・あと少しだったのに・・・あと少しでアイツを助けたのに・・・」

涙で顔がグチャグチャになった、胸が苦しくなった。

「・・・でも平気もう少しでまたアイツに会えるから・・・黒子ごめんね」

最後に一番の理解者であった後輩に謝った。

そんな風になっているのに空気の読めない奴らが現れた。

「その服、常盤台の制服だよね？どうお兄さん達と一緒に来ない？」

「・・・たつく人が悲しんでるのに空気が読めない連中ね！」

「なんだとクソアマ！」

「よせ、ごめんね、でも俺達君の事が心配でさあ」

「別に心配される必要はないわ、そこ退いてくれる？」

「そんな冷たくしないでよ、おごってあげるからさ」

「いらないわ、私は帰りたいのとおとと退きなさい」

「んだとゴラ！人が折角優しく声かけてやってるのによお」

次の言葉に美琴は激怒した。

「どうせ、彼氏に振られたただけだろうがよう」

「・・・今アンタなんて言った？」

「ああ？彼氏に振られたただけだろうが」

ブチンッ

ついに自分を抑えきれなくなった。

「いいわ相手になってやる、常盤台の超電磁砲を怒らしたらどうなるか、身体で知りなさい！」

『！！』

その言葉を聴いた瞬間男達は顔を青ざめたり腰を抜かしたりした。

今の美琴は一方通行以上の殺気を出していた。
アクセラレータ

周りの人達は一斉に逃げ出すほどだった。

「ひっひい」

リーダー格の男はまるで女のような声を出だした。

「でも感謝しないとね、アンタ達のような人間がいたからアイツに出会うことができたから・・・それに免じて命だけは助けてあげるわ」

その言葉に一瞬男達は光を見たが次の言葉で奈落の底に落とされた。

「特別に性機能を潰して、一生車椅子生活だけで許してあげるわ」

男達はずいに失禁までしてしまった。

鬼と化した美琴は男達に襲いかかろうとしたが・・・その時あの少年の声が聞こえた

「・・・」

・・・気のせいよね、そう気のせいよ、だってアイツはもうこの世界にはいない。

これから会いに行くんだから・・・

「・・・」

どんだん声が聞こえてきた。

・・・幻聴？とうとう私も駄目になったのかな・・・

と思ったが次に聞こえた言葉で我に返った。

「御坂！やめろ！」

その言葉は懐かしいあの少年の声だった。

「当麻！」

私は無我夢中でアイツの腹に飛び込んだ。

「なんで、なんでアンタが生きてるのよ！」

「いやゝそれがですね当麻さんも分りませんが地元の人が助けてくれたそうです」

「・・・でもよかった・・・」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないわよ馬鹿！」

でも嬉しい当麻が生きていたなんて

「御坂」

「なによ？」

「ただいま」

「・・・おかえり」

こうして私達は再び出会ったのだった。

再会（後書き）

次は佐天さんか黒子を書きたいと思います。

幻想殺し（ヒーロー）参上！（前書き）

佐天さん√一話目ですよろしく願いします^^

幻想殺し（ヒーロー）参上！

・・・あちゃゝ最悪な状態・・・、あと少して抜けれたのにまさか能力者がいるなんて・・・

話は少し前に戻る・・・

今日は久しぶりに1人で出掛けている、そんな時私は男に囲まれている同じ学校の娘を見つけた、私はどうしようか迷ったけど勇気出して止めようとした。

「ちょっとアンタ達その子嫌がつてるんだからやめなさいよ」

「おお結構可愛いじゃねえか、この子と一緒に俺達と遊ばないか？」

「結構です平瀬さん行こう」

彼女を引っ張って立ち去ろうとすると当然男達はふさいだ。

私は少し考え、一つ案を出した・・・まあ強行突破だが・・・

（平瀬さん、123で走るよ）

（うん）

（123）

「行けえ」

猛ダッシュで走ったが・・・前方にあったごみらしき物が燃えた・
・いや燃やされた。

・・・まさか能力者がいるなんて・・・

「それ以上動くとのゴミのように燃やすぞ！」

私達は動く事が出来なかった、いや動けなかった恐怖で足が震えてしまったからだ。

回想終了

本当に今回はやばそう・・・どうしよう。

「よ～しいい子だ」

「気を取り直して、一緒に行こうか」

私達は強引に連れてかれそうになった。

そんな時ツンツン頭の少年が現れた。

「爆音を聞いてきてみたらまさかこんな現場を見るとはな」

「なんだてめえ」

「お前ら恥ずかしくないか？相手は中学生だろいい大人が複数で中学生を囲むなんて恥ずかしくないのか？」

「うつせんだよ、やっちまえ！」

『おう！』

「いいぜ、それで通すなら、まずそのふざけた幻想を俺がぶち殺す！」

そう言っている間に突っ込んできた手下を簡単に打ちのめした。

「てめえらそんなものか？それならあのビリビリ中学生の方がもっと強いぞ」

「うるせえ」

今度は2人で襲ってきたが少年はしゃがんで手下のパンチをかわした。しゃがんだ後二人の足を払い2人は見事に転んだ。

「てめえ何者だ」

「ただの通りすがりの無能力者だ」

「ぶつ馬鹿かお前自分から弱点を言うなんて笑えるぜ、死ね！」

男達のリーダーは火の球を少年に投げつけた。

ボンッ

男は勝利を確信したが・・・次の瞬間逆に恐怖感に襲われた。

ビキャオンッ

「そんな攻撃俺には効かない」

なんと少年は無傷だったのだ

「ひい」

「彼女達の恐怖と比べたらこんな物痛くもない」

男は無我夢中で火の球を投げたが少年には当たらなかった。

その間も少年はリーダーに近づいてきてる。

「彼女達の恐怖を味わえ大馬鹿野郎！」

バコッ

少年の右ストレートが見事にリーダーの顔面に直撃した。

私はただ見ているだけだった、いや彼の戦う姿に見惚れていたのだ
った。

その後少年は近づいてきた。

「大丈夫か？」

「はっはい大丈夫です／＼」

「ありがとうございます！」

その後、騒ぎに駆けて白井さん達が来たのだった。

「・・・また貴方ですか・・・」

「なんですかその言われよう？」

「こういうのは私達、ジャッジメント風紀委員の仕事ですの、貴方といい、お姉さまといい一般人には危険だと何度言えばわかるのですか？」

「あの状況は待っている余裕はなかった」

「それでも一般人は手出し無用ですの！」

「ちょっと待ってください！」

私は彼が攻められている事にいてもたってもいられず私は白井さんの話に割り込んだ。

「もし彼がいなかったら私達今頃男達のオモチャにされていました、彼は私達の恩人です攻めないでください！」

「・・・わかりましたわ、今回は佐天さんに免じてゆるしてあげますわ」

何時もは1時間以上する白井の説教だが今回は10分足らずで終わったのだった。

事情徴収が終わり私は英雄と一緒に戻る事になった。

「いやゝ助かりました」

「いえいえ、こちらこそ」

「アンタのおかげで白井の説教が10分足らずで終わった、本当こんな幸運な日はないですよ」

「幸運なんて大げさですよ」

「いやいや、この不幸体質の上条さんにとっては幸運です」

「上条さんって言うんですか？」

「ああ、癖みたいなものだよ、あっそういえば自己紹介がまだだったな俺は上条当麻」

「私は佐天涙子です」

「よろしくな佐天」

「こちらこそよろしくお願いします上条さん」

その後上条さんとは意気投合しメアドを交換するような仲となったのだった。

幻想殺し（ヒーロー）参上！（後書き）

次回は黒子か初春を載せたいとおもいます^^応援よろしく
願います^^

出会い、どんな能力も効かない右手を持つ男（前書き）

初春編スタートです^^ 本文へどうぞ^^

出会い、どんな能力も効かない右手を持つ男

私は幻想御手事件の後、ある都市伝説に興味を持ちました。
レベルアップ

都市伝説の名はどんな能力も効かない右手を持つ男、
イマジンプレイカー幻想殺し

いつの間にか私は幻想殺し探しに夢中になっていました、ある時はネットで情報集めをしてまたある時は彼がよく現れるというスーパ―に現地調査したりして早一月が経ちました。

いろいろな情報を集めたものの彼と直接接触したことはありませんでした。少しずつあれはデマだったのかなと思いついた頃、私は一つの事件に遭遇しました。私は白井さんと一緒に現場に向かいました、いつもは支部で指示していましたが今日はなんだか自分で現場を見たくなり白井さんと同行しました、と言っても白井さんは空間移動しながら向かっているのです。白井さんを追いかける形でしたが。

「風紀委員ですの、お縄に掛かりなさい」
ジャッジメント

白井さんは一足早く現場に到着し私が到着したときはいつもの決めゼリフを言っている最中でした。

白井さんが犯人を取り押さえようとした時、白井さんは呆れたようにため息をしました。

私はなぜ白井さんがため息をしたのかわかりませんでした。

白井さんはそのまま呆れたように話しました

「また貴方ですか、いい加減にしてほしいですの・・・」

「そう言ってもな白井、上条さんはこう言うのは見逃さない性質な
んでな」

「それでも一般人はこう言うのには手を出さないでほしいですの・
」

「わかったよ」

「全然反省してないようですが・・・」

そんなこと話している間にのぼせていた男が立ち上がり私に向けて
空気の球を放ちました。

白井さんはそれに気づいていなく私は怖くて足が動きませんでした。

私が死を覚悟した瞬間、白井さんと話していた高校生が私の前に飛
び込んできました。

ビキャオンッ

「あぶねえ、少し遅かったら大変なことになっていた」

空気の球は彼の右手に消えていきました。

私は少し固まった後彼に問いかけました。

「もっともしかして貴方が幻想殺しですか？」
イマジンブレイカー

「幻想殺し？」

「それならどんな能力も効かない右手を持つ男の人ですか？」

「まあ確かに俺の右手はどんな能力も効かないが」

「本当ですか！」

私は目をキラキラさせて上条さんを見つめた。

「この能力の事なぜ知ってるんだ？」

「ネットで都市伝説になってるんです、どんな能力も効かない右手を持つ男幻想殺しと」

「そうなのか・・・幻想殺し・・・カッコイイな」

「よし決めた今からこの能力の名は幻想殺しだ！」

私は質問してみた

「あっあの」

「どうした？」

「上条さんはLVはいくつですか？」

「俺は無能力者（LV0）だよ」

「え？」

そんなすごい能力なのにLV0なんて正直信じられなかった。

再び質問してみた

「なぜLV0ですか？」

「俺の能力はシステムスキャンに通らないんだ、だからLV0なんだ」

「・・・そうですか・・・」

えっシステムスキャンに通らない能力なんてあるんですか？？

私は心の中で混乱していた。

「じゃあ、いつからその能力に目覚めたんですか？」

「生まれつきだよ」

「えっ」

私は驚きを隠せなかった。

生まれつきの能力者なんてはじめて聞きました・・・

「恋人とかいるんですか？」

「・・・いないよ、ただ俺の周りは女性が多いな・・・」

「そうですか・・・」

「最後にメアドを交換してください！」

「いよいよ別に」

私はついに幻想殺しと遭遇しさらにメアドまで交換できた事に喜びを隠せなかった。

出会い、どんな能力も効かない右手を持つ男（後書き）

次回は黒子編ですお楽しみに！

初恋、相手は変態中学生？（前書き）

やっと黒子編が書けました。今回はどうしても黒子が上条を好きになる事がなさそうだったのであえて上条が黒子を好きになった設定にしてみました、ちなみに御坂は上条に好意を持っている状況です。

初恋、相手は変態中学生？

「ジャッジメントですよ、お縄に掛かりなさいですよ」

私は事件の現場に急行した、そこにはツンツン頭の青年が立っていた。

・・・またですよ、なぜいつもあの方が片付けているのです？

「貴方のヒーロー気取りは飽き飽きしましたのよ、今後一切事件に首を引つ張らないでくださいですよ」

「あゝそんな事言ってもな白井、ジャッジメントを待っている余裕がないんだよ」

そついうが実は違う理由がある・・・

「白井本当にすまん、許してくれ」

俺は素直に謝ったがまあいつも通り1時間程度お説教された・・・

「はあゝ今日は見られなかったな・・・」

俺は少し落ち込んで暴食シスターのいる我が家へ帰ったのだった。

「とうまゝ今日もあの変態女にあつてきたの？」

「ギクツそんな事ありませんよインデックスさん」

「とうまゝそんな顔じゃバレバレだよ」

「まっいいけどね、とうまが誰を好きになろうが関係ないもん」

そうこの男はあの最強の風紀委員に恋をしたのだった。

俺は1人風呂でため息をした。

「今日はアイツの横顔見れなかったな・・・はあ」

何故この男が白井を好きになったかという・・・

・・・前の月とある事件が起きて俺は巻き込まれた。

「・・・まさかこんな日に強盗と出くわすなんて・・・不幸だ・・・」

今日は丁度奨学金が出る日俺は銀行に行つたんだが・・・

俺の前の客がそわそわしていた・・・なんか嫌な予感をしたが俺は構わず待っていたすると・・・

「おい金を出せ！」

予感的中、前の客は強盗に早替りした。

そのまま俺を含めた客達が隅に寄せられた。

強盗は4人組らしく1人は強能力者と思われた。

「・・・何でこんな時に・・・」

「ん？何か言ったか」

「・・・」

俺はじっと待った、そう奴らを倒すチャンスを。

そんな時強盗の1人が消えた・・・いや飛ばされた。

仲間の強盗達が動揺している中1人の少女が現れた。

「風紀委員ですの、お縄に掛かりなさいですの」

そう最強の風紀委員と噂される大能力者白井黒子であった。

その後は一瞬だった、まず白井が武器を持っている強盗にダーツを御見舞いし、即座に空間移動し強能力者ではない方を空間移動で飛ばした、その後強能力者と一戦したが圧勝だった。

「・・・また貴方ですか・・・」

「白井悪いが今回は被害者だ」

「あら珍しい事もあるのですね」

「悪いか？被害者じゃ」

「いえ、ただ珍しいだけの事ですよ」

ふと見てみると野次馬の中にビリビリ中学生がいた。

それを発見した白井は横を振り向き惚れ顔をした・・・そうその惚れ顔が上条当麻の胸に刺さったのだった。

それ以降上条当麻のタイプは寮の管理人のお姉さんから、茶髪のツインテールの年下に変わったのだった。

それ以降上条当麻は出会った事件は積極的に参加するようになった。
・・・

「はあゝ明日もまた白井に会えるかな・・・」

ちなみにまだメアドは持っていない、本人は欲しいのだが中々相手に言えないのだ・・・

御坂に頼もうとしたが御坂はそれに激怒しいつも以上の殺気で襲ってきたので白井のメアドは教えてもらえなかった。

「なぜあそこまで怒るんだ？俺の事好きでもないのに・・・」

この男は御坂美琴のアプローチは好意と認識していなかったのだ・・・
確かに勝負しなさいとかは好意には見えないが・・・

「ああゝどうしたらアイツのメアド教えてもらえるのだろうか・・・」

上条当麻は悩んでいた。

一応土御門にも相談したが返ってきた答えが

「カミちゃんにもやつと春がきたにや」

全くアドバイスになってなかった。

「はあ、明日青髪ピアスにも聞いてみるか・・・」

その翌日上条狩りが行われたのは言うまでも無かった。

そんな中でも上条当麻の頭は変態中学生で頭がいっぱいだった。

初恋、相手は変態中学生？（後書き）

・・・魔術サイドの案が出ない・・・もしかしたら超電磁砲の方を
どんどん進めるかもしれません、魔術サイドのファンの方本当にす
いませんm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6784r/>

とある科学のちょ～ ♪ 電磁砲～禁書目録もあるよ ♪

2011年8月29日19時04分発行